

丹波焼の里 ミュゼシター

2026
spring
summer

vol.
39

発行：やきものの里プロデュース倶楽部



丹波の手仕事 匠の技 25
茶陶まるか窯「摺鉢」
市野 年彦氏

『逸品!』兵庫陶芸美術館
学芸員 私のオススメ作品

ユネスコ創造都市 サンタフェ市
記念交流訪問

インタビュー

『MINGEI ALIVE -いま、生きている民藝-』
記念講演 「いまなぜ民藝か」

鞍田 崇氏

茶陶まるか窯 工房



茶陶まるか窯 市野 年彦

T 6699・2135

兵庫県丹波篠山市今田町上立杭7・3

電話 079・597・2640

文・上田 智津子 写真・迫田 隆

丹波の手仕事

匠の技

25

茶陶まるか窯「摺鉢」 市野 年彦氏



窯元に着くと大きな貼り付け文の鉢が目に入る。入口から当主の市野年彦氏が優しい笑顔で迎えてくださった。中に入ると機械ロクロがズラリと並んでいる。すり鉢の成形は機械ロクロでされているということ、作業を見せていただいた。柔らかめの土の塊を型に入れて回しコテのついたハンドルを下ろすとあっという間に型に土がひろがり、はまっていく。何度か繰り返して縁にはみ出た土を取り除くと成形は出来上がり。型に入ったままで蹴ロクロに据えてすり鉢の目を立てていく。ギサギサのついたコテをスーッと降ろして目を立てる。蹴ロクロを回して次の目へ次の目へ。最後に美しく鉢の真ん中に中心ができる。さすがの職人の技である。

窯元で生まれた年彦氏は大学卒業後、鳥取の牛の戸焼の窯元に弟子入りし、陶芸を習得。牛の戸は民藝の窯でほとんどを手作業とする産地である。土づくりは細かく叩いた土を水簸して、踏んで作る。焼成は全て薪で焼く。そこでの2年半の修行は大変勉強になったと言われる。その後丹波に帰りまるか窯をお父様の勝助氏と二人で盛り立てていかれた。勝助氏は茶陶に興味を持たれて、茶道具を作られていて、「茶陶まるか窯」と窯名を付けられたが、今は年彦氏が食器を中心に作られている。

年彦氏は各所の陶芸教室で講師をされていて、毎年まるか窯の穴窯を生徒さんにも参加してもらって焼いておられ、手作りの良さを多くの人に伝えていきたいと思われている。これからの丹波焼については「いろんな方面で皆で手を取り合っていかなければ」と言われた。

窯元の前に流れる四斗谷川にかかるほとけ橋には大きな貼り付け文の壺が飾られている。父勝助氏の作品で、まるか窯や丹波焼の里を見守っているようだ。



市野 年彦作 摺鉢

ユネスコ創造都市サントラフェ市 記念交流訪問

丹波篠山市がユネスコ創造都市ネットワーク(UCCN)に加盟して、今年で十年の節目を迎えました。UCCNには、経済・社会・文化・環境の側面から8つの分野において、持続可能な発展のため、創造性が大切な要素だと捉えている世界408都市が参加しています。

丹波篠山市は、クラフト&フォークアートの分野で加盟しており、この記念すべき十周年を祝して、同分野の最初の加盟都市であるアメリカ合衆国サントラフェ市への訪問交流が実施されました。訪問団には、市職員の小林七子氏(企画総務部次長兼市長公室長)と難波穂氏(企画総務部市長公室ブランド戦略係主事)に加え、丹波焼の郷から、市野達也氏(兵庫陶芸美術館副館長・丹波立杭陶磁器協同組合理事長・陶芸家)、市野伝市氏と大上裕樹氏(陶芸家・昇陽齋)が参加しました。

市野氏と大上氏は、丹波とサントラフェ、それぞれの土地の土を用いた作品成形を行い、「しものぎ」の技法のデモンストレーションや、金継ぎのワークショップを開催するなど、現地の参加者との積極的な交流を図りました。また、丹波立杭陶磁器協同組合の活動や、陶芸家の暮らしを体験する「陶泊」の取り組みについても紹介し、丹波焼の背景にある文化や暮らしの魅力を伝えました。

標高2000mに位置するサントラフェ市は、空気が乾燥し、日干し煉瓦で作られたアドビ風の建物が立ち並ぶ街並みが印象的で、多様な民芸・工芸品のギャラリーがあるそうです。多くの芸術家が住み、ネイティブアメリカンやスペイン系シユ系の民族文化に溢れた街に触れ、大上氏は「今後の作陶に対する刺激になった」と語っています。また、訪問先のアメリカン・インディアン芸術大学附属博物館(MoCNA、

Museum of Contemporary Native Arts)では、茶道体験のもとでなしを受け、使用された茶道具の中には丹波焼の作品もありました。こうした交流を通じて、今後も様々なかたちで芸術・文化の交流を深めていくことを互いに確認しました。

世界に向けて丹波焼を発信し、文化と創造性を育み続ける丹波篠山市の姿が思い描かれます。

取材 田尻美友紀 写真 大上裕樹



おめでとうございます

令和7年度兵庫県技能顕賞

清水豊和氏

(炎丹久齋)

「逸品」 兵庫陶芸美術館 学芸員 私のおススメ作品



河井寛次郎 《三色打薬扁壺》1962年頃 兵庫陶芸美術館「こども学芸員とつくる『夏のこども美術館』」に出品

粗い土を混ぜて仕上げた器面に、赤、緑、黒の釉薬を打ち付けた、角形の扁壺です。作者は、民藝運動を推進した一人としての河井は、河井寛次郎(1890~1966)です。

現在の島根県安来市に生まれた河井は、中学校を卒業後、東京工業学校(現・東京科学大学)に進学します。在学中に窯業の基礎となる化学の知識を身に付け、1914年(大正3)には、京都市陶磁器試験場に技師として入所します。1920年(大正9)、京都市五条坂の清水六兵衛の窯を譲り受け、工房と住居を構え、当初は、中国や朝鮮の古陶磁を範とした作品を制作しました。

1926年(大正15)、宗教哲学者の柳宗悦、陶芸家の富本憲吉、濱田庄司と連名で「日本民藝美術館設立趣意書」を発表します。以降、無名の工人たちの手仕事によって生み出された、日常の品々に美を見出した民藝運動に深く関わり、この時期には、実用を重んじたうつわの制作を行いました。

その後、河井の造形は、「用の美」を超え、自由で独創的なものへと変化していきます。戦後は、うつわのみにとどまらず、木彫や書画、詩、デザイン、陶彫など、その豊かな造形世界を体現する作品を次々に生み出しました。

三色打薬は、河井の晩年を代表する作風のひとつです。偶然性を取り込んだ躍動感に満ちた造形からは、生涯、創造を続け、喜びとした、河井の精神が垣間見られます。河井の仕事に対する精神・思想は、現在も弟子、孫弟子をはじめ、多くの作り手たちに影響を与えています。

学芸員 村上 ふみ

陶芸文化プロデューサー 創立20周年

兵庫陶芸美術館を拠点にして活動している陶芸ボランティアグループが創立20周年を迎えます。

平成18年に美術館の「陶芸文化プロデューサー養成講座」を卒業した有志11人と3名の窯元が指導役として加わり創立されました。

丹波焼の里の魅力を発信するため平成19年に情報誌「ミューゼラター」を年2回発行することから始め、来訪者を案内する窯元路地歩きガイド、地域行事の「春ものがたり」や「陶器まつり」を応援する地域支援へと活動が広まりました。

平成26・27年には、「最古の登窯保存修理事業」の活動で、日干しレンガ造り、新束作り、窯詰め、窯焚き、窯出し等ボランティアワークの中心的役割を務め、同時に薪の代替としての竹燃料の可能性について、登窯を使用した実証実験にも挑戦しました。

また学社連携活動として県内の小中学校へ陶芸体験出前講座を支援し、これまで75校延べ3300人余りの陶芸体験のお手伝いができました。

平成28年から美術館の展示棟の一角に設けた情報コーナーでは、地域の作家作品を紹介する企画展などを年4回開催し、来館者からも好評をいただいております。

令和4年にはこれらの活動が評価され、兵庫県から「ともしびの賞」を受賞しました。



現在は、広報部、ガイド部、イベント部、学社連携部、情報部と5部制で活動しており、これまでの節目に20周年の節目を振り返り、丹波焼の里の活性化に少しでも貢献できるような活動を続けてまいります。

文 藤枝憲文

源泉かけ流しの日帰り天然温泉



緑に囲まれた広い露天風呂で ゆったり、のんびり、ほかほか。 農産物直売所、軽食コーナーも併設、 1日ゆっくりお過ごしください。



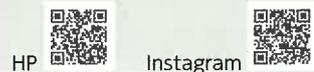
営業時間 AM10:00 ~ PM9:00 (PM8:30 受付終了) *営業時間は変更になることがあります。

定休日 毎週火曜日 (祝日は営業)

〒669-2153 兵庫県丹波篠山市今田町今田新田 21-10 TEL.079-590-3377

<http://yume-konda.com/>

◆入浴料◆
大人 800円 (中学生以上)
小人 400円 (小学生)
*小学生未満 無料



MINGEI ALIVE —いま、生きている民藝—

記念講演：「いまなぜ民藝か」

1970 兵庫県に生まれる
1994 京都大学文学部哲学科卒業
2001 京都大学大学院人間・環境学研究所
博士課程修了、
日本学術振興会特別研究員
2006 総合地球環境学研究所研究員
2010 総合地球環境学研究所特任准教授
2014~ 明治大学大学院理工学部准教授

2025年9月6日(土)
於 兵庫陶芸美術館

講師 鞍田 崇氏



2006年春、兵庫陶芸美術館の開館記念展第二弾「バーナード・リーチ展」を訪れたのが最初でした。

その2年後に安藤雅信さんと内田綱一さんに初めてお会いする機会がありました。それが、安藤さんが主宰されている「ギャラリー100草」で行われた「古道具 坂田展」に寄せてのトークセッション。「サブカルチャーと民藝」と題された企画でした。この頃、徐々に心を寄せ始めていた民藝を、一気にさっと風通し良くしてくれたいような感じがしたのをよく覚えてます。

今、2025年というのは、日本の近代社会がいよいよその次を探らなければいけないタイミングに来ているのではないかと、思うんです。明治維新から始まって、第二次世界大戦での敗戦を挟む激動の160年間になるわけですが、歴史家や作家でもあった半藤一利さんは、今から20年ほど前に刊行された昭和史の中で、この160年に渡る日本の近代の歩みを、40年周期で浮き沈みしてきたとおっしゃっているんです。2025年の今はまさに下り坂。一世紀半余りに渡った近代という考え方や枠組みから本格的に脱却していく時期に来ているのではないかと、思います。

その近代とは、技術的な革新もあり、とにかく速さ(スピード)を追求してきました。速く効率良く、ゴールに着くことを重視し、そのプロセスは顧みなかった。さらに情報化社会が進み、物の存在が希薄になっていく現代において、今、近代が打ち捨てた遅さ(スロー)やゴールまでのプロセスなどが見直されているのではないのでしょうか。

「いまなぜ民藝か」というタイトルは、民藝について今、注目する理由として、このいう時代の流れの中で、「遅い」みたいなものを、民藝に触れていくことで再確認したり、新たに創造したりということになるのではないかと、お話です。では、それは実際、どういふことなのかということ、少し古い議論なのですが、民藝という言葉を用いたメンパーの中心人物で宗教哲学者である柳宗悦の「民藝とは何か」という著作を紐解きながら、簡単に確認したいと思います。

「民藝から何を私が学び得たか」と題された文章の中で、「用とは何か」ということを主題としているんですね。民藝といえ、ば、「用の美」という言葉が、世間一般にも浸透して、使用、実用されるといふ局面に即した特有の美しさがある、と柳も言うのですが、用について論じる際に、「用にも二つある」と言うんですね。それは、「物への用」と「心への用」。現代社会が「物への用」に傾きがちなとすれば、問われている潤いは「心の用」。さらに柳は、「全き用」ということを言い始めます。用全体とか、パフォーマンスという感じですね。例えば、「用を助ける意味において美の価値が増しています」と。ここでは、用と美が分けて論じられているわけです。

「用は美を育む大きな力なのです」とも言っています。「全き用」というのは、この二つの表面的な物への用、心への用を支えている深層、あるいは根底にある用そのものの世界みたいなことを念頭に置いているんじゃないか。それを確信したのは、深澤直人さんが日本民藝館の館長に就任された時のあるインタビュー記事でした。「こんなに凄いかと興奮しました。感動しすぎて、『ああ、いいなあ』とそんな言葉しか出てこない。民藝は生活道具で、道具はまず使い勝手のよさがあり、そこに美しさが揃って合格だ」という感じがある。でも僕はここに、あるものを見て、その上に立ちのぼる何かを強く感じたんです。

民藝に限らず、あまねく私達が使う物たちというのは、物への用と心の用、これは、必要性和美しさ、必要性和デザイン性と、言ってもいいかもしれませんが、その両者を兼ねたところに、1つのものとして、形あるものとして実現しているという話だと思ふんですね。柳は彼らが発行していた月刊誌「工藝」に、「用と美」という論文を寄稿しているんですが、その中で「用」という言葉、「生活」という言葉に置き換える方がさらに良いかも知れぬ。最近、使われている「生活工芸」という言葉も、こゝで出てきて、「工芸」というのはあまねく生活工芸なのだ、というわけです。「全き用」は実は「全き生活」であって、そういうものがまず根底にあればこそ、表面的に立ちあがってきたものの中に、物への用と心への用、実用性と美しさというものが立ち現れてくるということかと思ふんですね。

「全き用」という言葉がよく出てきます。「全き用」、それは全き生活であり、生き生きとした命の営み、生ける生命であり、一言で言い換えると、英語のライフ。生活だけでなく、生命、命を表す言葉です。生ける生命という字面だけ見ても、命を生活という言葉が言おうとしているのは、命を活かすという、そういうことなのだな、と。その原点に柳が立ち返ったところで、「生活」と言わんとしているのではないかと、思った時に、問われている潤いはここではないかと思えてきたんですね。

先日、徳島にある「遠近(をちこち)」というお店の方とトークした時、藍染の染料について、今では化学染料のクオリティーも上がってきて、天然染料で染めたか、化学染料で染めたかの見分けがつきにくくなっているというお話がありました。ではなぜ天然染料にこだわるのかと聞くと、「純粋じゃないんです」と。どういふことかという、化学染料は99.9%の藍の色が出る純度を持っているのに対し、天然藍はせいぜい純度5%だ。つまり、ほぼ雑味なんです。それこそ効率というものを考えたら、到底かなわない。もう化学染料でどんどんやるに越したことはないという感じですが、柳がこう言っているらしいんですね。「純粋でないから、純粋だ」と。

禪問答のようですが、多分そうなんです。ね。生きるということ、ある目的だけになかったものへと限定されたものじゃなく、色んな要素を持っていて、生きたもの、生きた人間もそうではないか、雑味なんです。でも、この雑味というのが、実は大事なんじゃないかなと思えてきたんですね。なぜ化学染料が99.9%の純度を持ち得ているか、なぜだと思えますか。

「ゴールを見ているからです。速く染めたたい、藍色を出したいという。私達は常に結果だけを見ていて、プロセスが違う。そもそも見えているスタンスが違う。民藝に對して、そのスローライフ的なものに目を向けていった時に、私達が改めて気づかされるプロセスというのは、つい私達が陥りがちな、このゴールありきの発想で見失っ

てきたものを気づかせてくれるなあというところを、この時にも強く感じたということなんです。今はどういふ時代なのかということを確認する中で、明治以降の近代社会そのものが大きな節目を迎えようとしていることを踏まえて、速さとか、ゴールありきだけじゃない、次の社会、暮らし、生活を切り拓く手がかりとしての、スローライフとかプロセス、或いは、潤いのための、それらがどういふものなのかを確かめる機会としての「民藝」というところを、用というものをキーワードにお話を進めてきました。

もう10年前になつてしまつたのですが、そんな思いを、『民藝のインテリマシー』とおしさをデザインする」という本に書きました。その冒頭で、私はこんなふうに言います。「『いまなぜ民藝か』という問いの答えはこんなふうに見えるでしょう。民藝の中には、美しさでは足りない、いとおいさという別の価値の『芽』がひそんでおり、その芽を育てていくことこそが、いま方々を考へる重要な手がかりになる。だからこそ、いま民藝なのだ、と。ちょうど今年が民藝という言葉が生まれて100年の節目に、改めて私達が、ただ古いものとしていいね、ということだけに尽きない何かを、特に今回の展覧会は、展示室を進むたびに、「これ何の展覧会だったっけ」と思うぐらい(多様)ですけれど、それでも最初から確信的に民藝というものを通して、私達が何を掴まなければいけないのかを、言葉というよりも、やはり物がビシビシと伝えてくれる、そんな展示になっていくんじゃないかなと思います。

最後になりますが、民藝の100年の節目、兵庫陶芸美術館の20年の節目ということとあわせて、もう一つの節目としてここで触れておかなければならないのは、阪神・淡路大震災からの30年という節目ですね。このお膝元の兵庫であればこそ、何か物の存在の確かさを、もう一度確かめる場所になるんじゃないか。この展覧会もそういう機会になっていくのではないかと思います。

取材・写真 迫田 隆

※掲載している展覧会については、対象となる特別展・テーマ展に係る予算が議決されその予算の執行が可能である場合に開催となります。

●特別展のご案内

This is SUEKI—古代のカタチ、無限大！

2026年3月20日(金・祝)～6月14日(日)

約1600年前、朝鮮半島から伝来した技術により誕生した須恵器は、日本の陶磁器生産の礎を築きました。古墳時代から平安時代にかけて、祭祀や日常、宮都や寺院など多様な場で用いられ、時代や各地域の文化に応じて豊かな造形を展開しました。本展では各地の須恵器の優品を通して、古代人の創造力と技術力を紹介します。



鳥付装飾須恵器
古墳/飛鳥時代(7世紀)
広島県北広島町石塚2号墳出土
広島県立歴史民俗資料館

ゲンダイトウゲイ*ミニ*クロニクル—やきものはアートだ！

2026年9月19日(土)～11月23日(月・祝)(予定)

「現代陶芸(ゲンダイトウゲイ)」は、長い歴史を持つやきものが戦後に自由なカタチを得て、幅広い表現を展開するようになったものです。本展では、現代陶芸の魅力のパイオニア世代のレジェンドから新進気鋭の若手作家まで、「クロニクル(年代順)」かつコンパクトに紹介します。



林 康夫《Form IV》1997年
兵庫陶芸美術館

●テーマ展のご案内

丹波焼の世界 season10

2026年3月10日(火)～11月23日(月・祝)(予定)

平安時代末期に開窯した丹波焼は、2017年に日本六古窯の一つとして日本遺産に認定されました。

本展では、当館設立の契機となった田中寛コレクションを中心に、丹波焼の優品を紹介します。あわせて開館後に収集した古陶磁や現代陶芸を展示し、当館コレクションの広がりや魅力を展観します。



丹波《色絵桜川文徳利》
江戸時代後期(19世紀)
兵庫陶芸美術館(田中寛コレクション)
兵庫県指定重要有形文化財

こども学芸員とつくる「夏のこども美術館」

2026年6月27日(土)～9月6日(日)

兵庫陶芸美術館・陶芸アートカードの完成に合わせて、公募によって集まったこども学芸員や学生スタッフなどと考えを深める中で生まれる多様な見方によって、当館の所蔵品を紹介します。地域と連携し、やきものについて学び、体験することを通して、作る・使うという視点も交え、陶芸文化の魅力を発信します。



東山《染付雪花文鉢》
江戸時代後期(19世紀)
兵庫陶芸美術館

兵庫陶芸美術館 〒669-2135 兵庫県丹波篠山市今田町上立杭4 電話：079-597-3961 (代表) HP <https://www.mcart.jp>

丹波焼の里情報コーナーのご案内
「陶芸文化プロデューサー 創立20周年作品展」
3月19日(木)～4月10日(金)
「丹波焼と花のうつわ」
4月14日(火)～6月14日(日)
兵庫陶芸美術館 展示棟入口横 観覧無料
企画：陶芸文化プロデューサー
協力：丹波焼窯元等

プレゼントのお知らせ
兵庫陶芸美術館・こんだ薬師温泉の招待券を2施設セットでペア5組10名様にプレゼント。
●応募方法
ハガキに 〒住所・氏名・年齢・本紙の入手場所(○美術館など)・ご意見、ご感想をご記入の上、下記の宛先までお送りください。
●締め切り 8月末日消印有効。
●宛先
〒669-2135 丹波篠山市今田町上立杭4
兵庫陶芸美術館内「陶芸文化プロデューサー」
「ミュージセター39号 プレゼント係」宛
当選発表は発送をもって代えさせていただきます。

▼問合せ 兵庫陶芸美術館
電話：079-597-3961

▼問合せ 兵庫陶芸美術館
電話：079-597-2034

《兵庫陶芸美術館》
5月3日(日・祝)～5日(火・祝)
展覧会を特別割引でご観覧いただけます。
詳しくは、ホームページでご確認ください。

▼問合せ 丹波立杭陶磁器協同組合
電話：079-597-2034

丹波焼春の軽トラ市
5月5日(火・祝)10時～16時
兵庫陶芸美術館入口周辺

《立杭陶の郷・各窯元・最古の登窯》
ワークショップ・工房
4月29日(水・祝)～5月5日(火・祝)
窯元イベント・グループ窯ガラムンWS・
トチノキマルシェ、スタンブラリーなど
5月3日(日・祝)～5日(火・祝)

◆第20回「やきものの里 春ものがたり」
緑豊かな自然に囲まれたやきものの里で、様々なイベントを開催します。
期間 5月3日(日・祝)～5日(火・祝) 3日間
10時～16時まで
会場 立杭陶の郷 各窯元、兵庫陶芸美術館など
内容

イベント案内

丹波伝統王芸公園

立杭陶の郷

丹波焼を「見る・作る・楽しむ」

〒669-2135 兵庫県丹波篠山市今田町上立杭3
TEL.079-597-2034 FAX.079-597-3232
URL.<https://tanbayaki.com>
【開園時間】AM10:00～PM5:00 (通年)
【休園日】年末年始
毎週火曜日
(但し、祝日は営業します。)

窯元横丁
丹波焼の50軒の窯元の作品を買うことが出来る「窯元横丁」。どこか懐かしくあたたかな空間で、ゆったりと買い物をお楽しみいただけます。伝統的な丹波焼からアーティスティックな作品まで、さまざまなやきものが展示販売されています。一つひとつの作品をじっくり手にとりながら、散歩気分で歩いてみてください。見ているだけでも楽しくなりますよ。

陶芸教室
丹波焼の郷で、陶芸を体験してみませんか。オリジナルの作品を制作する手びねり(粘土細工)や、カラフルな絵付けを手軽に体験していただけます。また、毎週日曜日には予約制で「ガラムンアクセサリーワークショップ」を開催しております。是非ご利用ください。